

「山での挨拶」と「携帯灰皿」

安全性研究チーム長



宮崎 茂

MIYAZAKI, Shigeru

5月中旬に妻と日光へハイキングに行ったときにこんなことがあった。コースの後半で反対方向から小学生の団体が歩いて来た。私たちとすれ違う直前、先頭を歩いていた引率の先生とおぼしき人が小学生たちに向かって、「さあ元氣よく挨拶しましょう」と促すと、小学生たちが突然大声で「こんにちは！」と叫びだした。先生は、山で人に会ったら挨拶するのが礼儀という「常識」（それが正しい常識なのかどうか、議論があるところであるが）にしたがい、小学生に元氣な挨拶を求めたのであろうが、彼らの挨拶はまさに叫び声といえるほど「元氣」だったので、鳥の鳴き声や風の音に耳を澄ませながら歩いていた私たちは、思わず顔をしかめてしまった。先生に言われたとおり元氣に挨拶をしてくれた小学生たちにはちょっと悪いことをしたと反省しているが、引率の先生には、「山での挨拶」だけにとらわれず、静かな山の中で大声を出す（しかも団体で）ことの影響について、想像力を働かせて欲しかったと思う。

研究を進める上でも、先入観やいわゆる常識にとらわれない、広い視点からの柔軟な発想が重要である。先日、新しい蛋白質結晶化技術を使ったベンチャー「創晶」の中心メンバーである、大阪大学森勇介教授のお話を伺う機会があった。講演は、無機・有機結晶の専門家と蛋白質化学の専門家との出会いによる、新しい蛋白質結晶化技術の開発とその実用化の過程の紹介であったが、森先生のグループの、異分野融合による見事な成果を目の当たりにして、多方面から物事を見ることの重要性を再認識した。

ところで、自己の主張をとすすために、意図的に一方向だけからの情報を発信するという

例もしばしば経験する。5月31日は国際禁煙デーであったが、日本たばこ産業の最近のテレビCM「携帯灰皿でマナーも携帯しよう」はちょっと気になる。たばこのポイ捨てなどを減らし、たばこへの風当たりを少しでも減らそうという意図であろうが、携帯灰皿によって歩きタバコが増えるのではないかと心配している人もいる。そもそも、携帯灰皿を使わなければならないような場所では、たばこは吸わないのがマナーではないだろうか。このような一方的な主張を見ると、予算獲得のための資料で自己の応募する研究テーマの重要性だけを強調し、不都合なことには触れようとしない自分の姿が思い浮かび、なにか落ち着かなくなるものである。今回の日光でのハイキングでは、禁煙のはずのハイキングコースで、携帯灰皿を使ってたばこを吸っている人を見かけた。携帯灰皿でマナーを携帯するのはどうも難しいことのようにある。

いろいろな方向から物事を捉える、あるいは相手の立場になって物事を考えることが、日常生活はもちろん、研究を進める上でも大切だとは分かっているが、凡人にはなかなか難しいものである。先日の日光でのささやかなハイキングでは、新緑の木々や、巣作りに励む野鳥の姿などを楽しむことができ、心身をリフレッシュさせることができたが、同時に、ハイキングの途中で経験したちょっとしたエピソードが、研究者として忘れてはいけないことを再認識するきっかけを作ってくれた。